1 Ca-4

子供の遊びと地域環境――奄美大島における調査を通じて――

鹿児島大学教育　　池山　和子

〔目的〕近年の子供の遊びの変化には、自然や遊び場の減少等環境の物理的変化だけでなく地域共同体などの社会関係の変化の関わりも大きいことが指摘されている。子供の遊びが広がるためには、活動できる空間が子供にとって親和的な場になることが必要であり、そのためには大人間の付き合いの豊かさや他の子供たちの存在や活動などが正の影響を持つことが報告されている。本報告は地域の社会的雰囲気を含む環境と遊びとの関わりを調べる目的で都市化が大きくは進行していない離島の子供の遊びを調査したものである。

〔方法〕鹿児島県奄美大島島内の地域の異なる10小学校の１、２年生児童 299名を対象とし、保護者に質問紙調査を行った。調査期間は1990年12月、学校の担任を通じて質問紙の配付と回収を行った。質問の内容として遊びに関する項目の他に近隣との付き合いに関するものを設けた。有効 223（男児 106、女児 117）票（回収率75.7%）であった。

〔結果〕対象の家庭の約70%が核家族、３世代同居は約20%であった。一戸建居住者は約60%、居住環境が農山村である者が３割弱、近隣の大人同士の寄り合いや飲み方は１～２週に１、２回か約25%であるが殆どないとの回答も約27%あった。戸外で遊ぶのが好きとの回答が半数近い一方で、主な遊び場としては自宅の室内を80%が挙げており２位が友だちの家の室内、次に自宅の庭、近所の空き地と続いた。遊び相手としては同じ級の子供、きょうだいが最も多く、遊び仲間も本人を含む２～３人が最も多い。日常大人に断らず家から子供だけで自由に出入りをしているとの回答が約20%であった。奄美大島島内でも地域によって自然・社会環境が異なっており、これらの差異による比較考察を行った。